

朝日選書

202



藤原新也

チベツト放浪

藤原新也 著

チベット放浪

朝日選書 202

藤原新也 (ふじわら・しんや)

1944年福岡県生まれ。東京芸術大学
油絵科中退。69年以降12年間に東洋
全域を旅行、75年にはインド・チベ
ットにはいった。著書『印度放浪』
『天寿国遍行』『七彩夢幻』『逍遙游
記』『ゆめつづれ』『印度拾年』『全
東洋街道』など。78年第3回木村伊
兵衛賞、82年毎日芸術賞受賞。

チベット放浪

朝日選書 202

1982年3月20日 第1刷発行

定価 900 円

1983年10月10日 第4刷発行

著 者 藤 原 新 也
発 行 者 初 山 有 恒
印 刷 所 共同印刷株式会社
発 行 所 朝 日 新 聞 社



〒104 東京都中央区築地 5-3-2 電話 03(545)0131(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部 振替・東京0-1730

© S. Fujiwara 1982 Printed in Japan 装幀・多田進

0326-259302-0042

タイム・スリップ

—朝日選書版への前書き—

地表は、あちこちでタイム・スリップをしている。地球に住む様々な民族は、同時に今という時間を共有しているわけではない。人々は、それぞれ固有の地層年代の上に居る。

たとえば、アメリカ大陸のカルフォルニアの都市に吹く風の中で、僕はそこに東京の五年後、十年後の風景を想像したし、あるいは、アジア大陸の東岸、上海の街を歩いていた時、僕は自分の三十年前の幼児の頃に嗅いだ、ある種の匂いを思い出した。また、モロッコの山村の家に招かれて一夜を過ごした時、僕は寢床の中で自分の意識が一刻一刻と過去に向かって百年、そして二百年、とタイム・スリップして行くのを感じた。フィリピンのミンダナオ島の森奥深く、そこにはつい十年前まである少数民族によって石器時代が継続されていたし、ユーラシア大陸、アフガンの谷間には

中世のコーランの声が今に響き渡る。

このように、地球には様々な地層年代が露出している。だから、今、と言う時の計測を、そのような様々な地層の上に住む人々のすべてをひっくるめて当てはめるといふ考え方は一つの幻想だと思ふ。科学的に進歩した国の最も急進的な部分を、今、という時の計量の基準にする風潮は単純な傲慢である。地球に住まうそれぞれの人々には、それぞれの今、というものがあるのだ。

旅の面白さの一つは、この此岸の国の今から、彼岸の国の今へとタイム・スリップして行くダイナミズムの中にある。僕は過去十数年の旅の中で、最も急進的な今を持った国から、中世以前の時間を持った国まで、様々な地層年代の土地を幾度となくタイム・スリップして来た。そのような旅の中で、僕は時間というものの流れに対する一つの小さな単純な確信を持たられた。それは、人間の保持して来た今、というものは、過去の今から現在、あるいは未来の今に向かって逆進化しているということである。さらに言えば、科学は進化し、人間的なるものは退化するという地球上の時間の構図があきらかに見えたと言つてよい。

この本の旅の主題となつてゐるインド・チベットには、いまだ時折、中世、あるいはヴェーダの世界が垣間見えることがある。僕は日本の今から、その中世の今に向かってタイム・スリップし、二十代の大半をその時間の中に費やした。この本は、その人間として退化した今を持った一日本青

年が、過去に向かつて人間として、より進歩的である彼らの今の海の中に自己を投入した、小さな記録である。

一九八二年一月

藤原 新也

目次

タイム・スリップ——朝日選書版への前書き——

第一部 潮干の山越えて

第一章 笑つちまつたしやれこうべ髑髏

第二章 妙音鳥カラビンカ

第三章 天に優しき地獄

第四章 遠くの彩いろどり

第五章 僧

第六章 僕から生まれた山犬が、山の向こうでな哭いた

123 97 73 43 25 5

第二部 ごくらく道

太古の〈血〉が残した土塊^{つちくれ}

数珠^{じゆず}を爪繰^{つまぐ}るペマ・タギー

オム・マ・ニ・ベ・メ・フーム

上方^{ヤルシヤン}神降^{ポイ}下の神嶺^{ハリ}

その道……

あとがき

チベツト放浪

第一部 潮干の山越えて

第一章 笑つちまつたしやれこりべ髑髏



虫なのに、人間のような名前をして、沼地に棲んでいる、源五郎という虫……ユーモラスな名前とはうらはらに、鋭い牙を持ち、肉食である。魚や虫や貝、その他もろもろの生き物、時にはそれらの死屍を食べて生きている。この虫の特異性は、池沼に潜って生肉や死屍などを喰らっているくせに、その背甲の下に羽をかくし持って、時に空中を飛翔することにある。それも昼中でなく夜中に飛ぶ。

沼に潜って生肉や死屍を食するなどとは下劣な虫に違いない。そんな虫がなぜ空中を飛ぶ術を心得ているのだろうかと思う。しかし、地球の過去を思うに、下劣な、卑しい生き物ほど飛翔願望という病の虜になって、おしまいには病が本性になり、本当に空を飛んだりしている。遠い過去にあったのは、地べたに這いつくばって鳥の卵などを盗み食いしていた爬虫類の類、つまり蛇や蜥蜴のようなものが鳥に進化して空中を飛び回っているし……近い話では、八万四千余もの卑しい煩惱群をかかえているという人類が、めでたく団体で空を飛んでいる。かの源五郎も、この種の、悪業即飛翔病の類型の中に組み込むことができるような気がする。

しかし、この虫は、なぜ夜にしか飛ばないのだろうかと思う。手前勝手に考えるに……この虫はひよつとすると夢を見ているのではないか、と思う。日常は沼に潜って、生肉や屍などを喰らっているがゆえに、夜になるとその忌むべき所業にさいなまれ、反動として、妙に柄に合わぬ高貴な夢を見たがるのではなからうか。人間にも夢遊歩行というのがあるように、この虫にも夢遊飛翔とい

うのがあるのではないか、と思う。

僕はこの虫のことをあまり好ましいとは思っていないのだが、この源五郎という虫の生態のことを考えていると、ふと、魔がさすように思い当ることがある。この源五郎……どことなく、僕に似ているように思えるのである。この虫の生活とその行動、どことなく、印度における僕の所業に類似するところのものがあつたのだ。

僕はかねてより、自分のことを虫のようなものだ、と思つていた。印度大地を這うように旅しながら、そう思うのである。しかし、ヒマラヤ連山が、蓮の花の千の花弁だと知り、印度大地が泥沼だと知った時、おのずと、わが無名虫の生存圏とその環境などが知れてき……もはや、菜の花畑を舞う蝶などとは縁遠い身の上であることも知れてきた。……それではと、沼の面にあつて、泥に汚れることなく、比較的達者な泳法で泳いでいるあの水黽という虫ならば、と、ひそかに意中のムシを心あたためていたのだが、僕自身の所業を顧みるに、僕は泥沼印度でかなりの長きに渡つて、ヒトの死屍に執着しており、それを写真におさめ、それを売り食ひしてきた身の上……いわば、死屍を喰らつて生きてきたのであつた。ところが、あの水黽という虫、ものの死屍よりももっぱら交尾の方に執着している様子であり、これとは似ていないし、似ていたくない。

そこで、沼地に棲息して死屍を食する虫となると、数種の虫が浮かび上がってきたのだが、中でも、源五郎という虫は、その名が僕自身の人格を貶しめないような、何か伝統的な趣きを持つてい

たので、僕はこの源五郎という虫に似ているのだなと思ひ込むようにした。とくに、僕はこの虫が、夜な夜な沼の面からふらりと舞い上がり、何のいわれもなく空中を徘徊するということに、心なしか共感を覚える。

鴉の群れは十万那由他

泥沼印度に、死屍行脚を続けながら、僕も時おり、夢のような……夢を見るのであった。

——〈夢〉。ガンジスの対岸を見ていた。彼岸は黒い色をしていた。此岸も真つ黒、彼岸も真つ黒。僕は此岸より、彼方の黒い岸に向かつて、思いつ切り石を投げつけたのである。彼方の岸の一点に、黒いものが、粉のように散って舞い上がった。その黒い粉は氣流の渦にすくわれるように次々に連鎖して空に舞い上がった。空が真つ黒になった。此岸の上にまで舞って来たその黒い粉を見上げると、それは群れなす鴉だった。群れは数にして十万那由他（兆）を超えていた。群れはさらに舞い上がり、黒雲となり、それは大雨となって河に帰った。僕は彼岸を見た。彼方の岸には、五彩の色が水玉を落としながら咲き乱れていた。花は数にして十万那由他を超えていた。マンダーラ